

英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析

—認知言語類型論からの試論—

Analysis of Translation Shifts in the Act of Translating and Interpreting between
English and Japanese from the Perspective of Cognitive Linguistic Typology

河原清志

東京外国語大学

Abstract

This paper attempts to analyze translation shifts in the act of translating and interpreting between English and Japanese from the perspective of cognitive linguistic typology. Focusing on grammatical categories of the two languages, it analyses and characterizes the naturalness of each language; English has a cognizing subject's viewpoint extrapositioned/fixed—a type of cognitive mode with strong self-reference whereas Japanese has a cognizing subject's viewpoint intrapositioned/moving—a type of cognitive mode with strong re-presentation of referents. And by switching cognitive modes, translators and interpreters convert grammatical structures in order to make natural translation shifts.

1. はじめに

本稿は、「英語感覚」や「日本語感覚」、あるいは「自然な英語」「自然な日本語」とは一体どういうものなのかについて、主に文法範疇に焦点を当てて、一方言語の原文（英語・日本語）とそれの他方言語への通訳および翻訳の訳出結果（日本語・英語）¹を質的および量的に比較分析し、一般的に「英語論」、「日本語論」として語られているものに量的データから迫りつつ、英日語双方向における訳出行為に内在するシフト²の実際について詳らかにする試みを行うことを目的とする。

一般に、よい翻訳とは、(1) 正確で (Baker の言う *accuracy*)、(2) わかりやすい (Baker の言う *naturalness*) 翻訳であると考えられていることはいかなる実務家や理論研究者も疑問を挟まないであろう（例えば、安西・井上・小林, 2005, pp. 49-65, 68-89; Baker, 1992, pp. 56-59）。しかし、何をもって正確でわかりやすい翻訳とするかについては、「直訳」対「意訳」の古典的な対立 (Munday, 2008, pp. 19-23)³以来、理論上いまだに解決を見ていないと言ってよいし、また、現実的にも、翻訳の目的 (*skopos*: Vermeer, 1989/2000) や翻訳のジャンルの違いなど諸要因によって、よい翻訳の定義は変わりうる。

ところが、一般的な意味で、ある特定の言語の「自然さ」や「言語らしさ」は存在していることは否定できないし、その言語の話者であれば誰しもその言語の「自然さ」や「言語らしさ」を支える「言語感覚」を持ち合わせている。この「言語感覚」には、(1) 語彙

レベルにおける範疇化 (categorization) の問題として捉えられる側面、(2) 文法範疇レベルにおける事態構成 (construal) の問題として捉えられる側面、(3) テキストやレトリックのレベルにおけるテキスト構成 (text organization) の問題として捉えられる側面 (メイナード, 2004) など、諸側面がある。

そこで本稿では、議論の焦点を絞るため、「言語感覚」というときの「感覚」とは、(2) を想定したその言語の特徴、もっともらしさ、自然さを表象する何らかの典型 (prototype) であることとして⁴、文法範疇に限定して「言語らしさ」について分析し、通訳翻訳の実際において、どの程度「言語らしさ」を確保するためのシフトが起きているか、ないし、シフトを生じさせて言語らしさを確保するための転換操作 (conversion) をどの程度行っているかについて、具体例に即して検証してみたい。

近時、この文法範疇に関する言語ごとの典型性に関して、一般的な傾向として、いくつかの典型的な言語現象に焦点を当てたうえで、ある言語の特性を複数抽出し、その上で (認知) 言語類型論として概括する試みが盛んになされていて大変興味深い (下記第2節)、その言語特性はどの程度、言表に現われているのかについて量的調査を行うことは、その言語特性がどの程度の特徴づけとして正当かの裏づけになるだろうと筆者は考え、下記第3節で記しているテキストを選んで量的調査を行った。そして本稿では、通訳翻訳の訳出物を分析対象にして、英日語の事態構成 (construal)⁵の仕方に何らかの違いがあるかについて調査を行った。このような調査から、訳出行為におけるシフトの実際に迫ってみたい。

2. 先行研究

2.1 個別言語志向的言語類型論

本稿のいう個別言語の「言語らしさ」は、フンボルトのいう「内部形式」(inner form) (Humboldt, 1999, pp. xiii-iv, xx, xxx)、コセリウのいう言語の「形成原理」あるいは「いくつかの形成原理から成る統合的型態」(言語の各部分にまで浸透して働き、それによって言語全体を一つの統合体として特徴づけている動因)⁶、言語の類型 (tipo linguistico; コセリウ, 2003, p. 279) と解されるもので、これはサピアが「基本的構図」(a basic plan)、「裁断の型」(a certain cut)、「型」(type)、「構図」(plan)、「精髓」(genius) と呼んだ何かがしかの型 (pattern; Benedict) であって、「ある言語を全体として統合的に特徴づけられると思われるもの」(池上, 2007, p. 340) である。この特徴づけとは、個別言語志向的 (individualizing; Greenberg, 1974) に論じるならば、ある言語について特徴的と言われるようなものでも、実は他の言語にも目立たない形ではあるが認められることがあるもの (池上, 2007, p. 19) であり、ウォーフが「好まれる言い回し」(fashions of speaking) と呼んだもの (Whorf, 1956, pp. 158, 159) と概ね一致する。そしてこれには、各文法範疇の特徴が「典型性」を帯びて現象すること⁷と、各文法範疇間の関係に「相同性」(homology)⁸的な状況があることである。このような個別言語志向的言語類型論の代表は池上の一連の著作 (池上, 1981, 1982, 1991, 1999-2001, 2007) であり、近時の認知言語学からの進展も見せているが (中村, 2004)、一般的に研究が行われている英日語の対照言語学からの示唆も有益である (安藤, 1986 年

ど)。

2.2 英日語の相同的特徴の一覧

一般に言語類型論（コムリー，1992；ウェイリー，2006）と言え、一般化志向的（generalizing）なもの、分類志向的（classifying）なものがあり（Greenberg 1974）、言語使用における人間の認知のあり方との関連では機能的類型論（Foley and Van Valin 1984; Givón 1984/1991; Van Valin, 1993, 2005; Van Valin and LaPolla 1997）も提唱されている。しかし、本稿では、諸々の言語現象の事実を確認し、そこからある解釈を引き出すことで、一連の事実の相互関連を形成する基底にある形態(configuration)を素描することによって「言語らしさ」を探究することを目的としているので、個別言語志向的類型論（池上, 2007, pp. 56-74）を採用し、しかも人間の認知の営みとの関連にそれを求めた認知言語類型論を基に議論を進めることとする。

認知言語類型論では、諸々の言語事実の相互関連の背後にある形態を想定するものであるが、事実相互間の関係は相同性が認められるとされている（池上, 2007, pp. 75-102）。このことを前提に、日本語と英語の相同的差異をまとめると、以下のとおりになる。これは、池上（1981; 1982; 1991; 1999-2001; 2007）、安西（2000）、中村（2004）を参照しつつ、すべてを統合する形で一つの表にまとめたものである。具体的言語事実レベルと、その背後にある認知的な形態レベルもすべて各言語の特徴として一括して以下の表にまとめている。（但し、個々の項目の詳細は紙幅の制限上、割愛する。）

相同性の項目	《I モード》 日本語	《D モード》 英語
認知モード	状況密着型認知形態	認知主体外置型認知形態
認知主体のあり方	感受者（有情者）(sentient)	動作主(agent)
名詞のとらえ方	無界性(unboundedness)	有界性(boundedness)
名詞のスキーマー	連続体スキーマー	個体スキーマー
状況のとらえ方	「コト」「トコロ」的言語	「モノ」的言語
1 人称代名詞	多様	一定
代名詞省略	多い	まれ
非人称構文	あり	なし
題目か主語か	題目優先	主語優先
R/T か tr./lm. か	Reference point→Target	trajector→landmark
動詞の焦点	行為中心	結果中心
終わり志向性	なし	あり
動詞のとらえ方	「なる」的言語	「する」的言語
存在か所有か	BE 言語	HAVE 言語
アスペクト(進行形・「ている」)	始まり志向	終わり志向
与格か間接目的語か	与格（利害の与格）	間接目的語（受け手）
（英語の）中間構文	直接経験表現	特性記述表現

間接受身	あり	なし
動詞 vs. 衛星辞付け	動詞辞付け	衛星辞付け
主観述語	あり	なし
擬声語・擬態語	多い	少ない
過去時物語中の現在時制	多い (e.g. 「る」形)	まれ
直接・間接話法	ほぼ直接話法のみ	間接話法も発達
話法の本質	共感話法	客観話法
主体移動表現	通行可能経路のみ	通行不可能経路も可
情況記述か行為記述か	情況論理性	行為論理性
その他の特徴	主観的把握、共感的発想、 環境論的自己	

これ以外にも、日本語の特質として、例えば池上（2007）は、形容詞の意味の内面的解釈への志向性、指示詞の用法における〈ここ〉への強い拘り、擬似関係節のようなくトト的表現への志向性、時制の処理における著しい〈いま〉への拘りなどを挙げている（池上, ibid., p. 355）。

2.3 本稿での分析対象項目

本稿は 2.2 節で掲げたこれらの言語事実をすべて取り上げるのではなく、言語の基本的構造である「言及と述定」（reference and predication）ないし「対象把握と内容把握」に関わる面に焦点を当て、ヤーコブソン（1973, pp. 149-170）の「転換子」（shifter）⁹に着目しつつ、言語（text）と発話状況（context）と発話主体（speaking subject）＝認知主体（cognizing subject）との関係における英日語の比較対照を通して、「言語らしさ」を明らかにしてみたい。

具体的には、まず①言及対象としては、名詞に着目し、主語・目的語（ないし補語）で名詞が使われている箇所、及び名詞に準ずる代名詞・指示詞が使われる箇所を注視し、その中で認知主体とコンテキスト、言語とコンテキストとの関係性を示す定冠詞・指示詞（指示代名詞・指示形容詞・指示副詞）と人称代名詞と称されている語をすべてマークする。本来転換子は「人称」を表象するが、コンテキストと関係付けられない限り言及対象を同定できない言語項目として、これらをすべて含むものとする。これらはコンテキストを指標するものとして、言語とコンテキストとの関係を明らかにする手がかりとなる。

次に、②述定（述語）に関しては、すべてチェックをし、転換子としての「法」と「時制」の態様を分析する。さらに、言及指示対象と述語の関係性を探るために、名詞の態様（モノ／コト／トコロなど）、動詞の態様（他動詞／自動詞、能動／受動、ナル／スル、HAVE／BE など）を分析する。

3. 調査対象と調査方法

3.1 調査対象

本稿では、英語から日本語の通訳データとして、2008年6月にNHKのBS-1で放送されたABCニュースの同時通訳と時差通訳¹⁰から適切だと思われるものを抽出した言語データを使用した(3名の通訳者の3サンプル)。また、日本語から英語の翻訳データとして、2008年1月26日のダボス会議における福田首相特別講演と外務省によるその英訳を使用した。今後、翻訳シフトに関して、様々なテキスト・タイプを包括的に調査してゆきたいが、本稿は、その一試論として、書き言葉と話し言葉の中間形態であり、かつ、両者とも通訳・翻訳ともに日常的に行われているタイプの言語データであるニュース原稿と講演原稿を選んで分析対象にした。

ABCニュースは3名3サンプルのうちから抽出した557語に相当する原文とその同時通訳・時差通訳を量的調査の分析対象にした。また、福田首相特別講演は外務省による英訳部分の冒頭から561語に相当する箇所とその日本語の原文を量的調査の分析対象にした。

3.2 調査方法

英語と日本語の平行・テキストを以下のように掲げ、まず英語に関して、2.3節での①定冠詞・指示詞・代名詞をチェックする。その際、人称代名詞の場合は□、定冠詞・指示詞の場合は___でマークする(文法化したthatやitは、that=指示詞、it=人称代名詞、と扱い、テキスト内照応の分析に資するようにする)。②述語の部分は、■でマークする。時制の影響を受けない準動詞はマークしないものとする。次に、日本語に関して、①指示詞・代名詞をマークする。また、コト(ト/カ)という表現箇所は___でマークする。②は動詞表現の部分をすべてマークする(be動詞に相当する日本語の助動詞部分も含む)。これは英語では準動詞として、あるいは動詞の名詞形として現われている箇所に該当するものも含まれる。これによって、英日語で品詞転換が行われている箇所や、動詞自体が時制の影響を受けているか否かについて、検討できる。具体的には以下の要領である(表1・表2)。

表1：事例①—ABCニュースと、NHKによるその同時通訳と時差通訳

英語原文	日本語同時通訳	日本語時差通訳
Good evening. <u>This</u> <u>is</u> just about <u>the</u> time of year when Midwest farmers <u>should be singing</u> about corn as high as an elephant's eye. But in many parts of <u>the</u> Midwest, <u>the</u> corn <u>this</u> year <u>will</u> barely <u>reach</u> <u>the</u> elephant's ankle. Record rainfall and widespread flooding <u>has ruined</u> much of <u>this</u> year's crop.	こんにちは。中西部のとうもろこしは例年の今の頃だったら、象の目のあたりの高さになっているはず <u>です</u> 。ところが今年はひざのあたりまでしか <u>あり</u> ません。記録的な雨と洪水で今年の生産、ほとんど破壊されてしまいました。 <u>これで</u> 価格が <u>上昇</u> しま	こんにちは。例年の今頃は、中西部の農家がとうもろこしの高さは象の目のあたりだと歌っている頃 <u>です</u> 。ところが今年は足首のあたりまでしか <u>あり</u> ません。記録的な雨と広い地域での洪水によって収穫の多くが <u>台無し</u> になってしまいました。

And <u>that</u> <u>may</u> <u>well</u> <u>mean</u> <u>higher</u> prices for everything, from what <u>we</u> eat to how <u>we</u> <u>fuel</u> <u>our</u> cars.	す。食料費から燃料費までです。	これによって食料品から燃料まで価格が上昇します。
---	-----------------	--------------------------

表 2：事例②—ダボス会議における福田首相特別講演と、外務省による英訳

福田首相特別講演	外務省による英訳
御列席の皆様、 ①米国のサブプライム問題や石油価格の記録的高騰等を背景に、世界経済の下方リスクが高まっています。 ②サブプライム問題は、新たな金融技術が開発され、同時にリスクが証券化等により世界中に拡散される一方で、それらに対するリスク管理が甘くなったことが問題の元凶ではないかと考えます。 ③今回の問題の、こうした「21世紀型の危機」という側面も踏まえ、持続的な経済成長が得られるよう、世界の経済・金融市場の在り方について議論していく必要があると思います。 ④現在は、リスクの再評価の過程です。⑤現状を過度に悲観する必要はありませんが、同時に我々は緊急に対応する意識をもって、各国が必要な対策をとるとともに協調して行動する必要があります。 ⑥サブプライム問題の解決に向けて、「バブル経済」崩壊の際の日本の苦い経験から言える教訓は、「素早い対応」と「金融機関の資本の毀損による信用収縮を未然に防ぐこと」の重要性です。	Ladies and Gentlemen, ①The risk of <u>the</u> global economy taking a downward turn <u>is</u> <u>increasing</u> against <u>the</u> backdrop of <u>the</u> sub-prime mortgage loan problem in <u>the</u> United States and <u>the</u> surge of petroleum prices to record levels, among other issues. ②<u>We</u> <u>have</u> <u>seen</u> <u>the</u> development of new financial techniques and, at <u>the</u> same time, risk <u>has</u> <u>come</u> <u>to</u> <u>be</u> <u>distributed</u> all around <u>the</u> globe through securitization. Yet <u>the</u> corresponding risk management <u>had</u> <u>become</u> overly lax. <u>This</u>, <u>I</u> <u>would</u> <u>argue</u>, <u>is</u> <u>the</u> root cause of <u>the</u> sub-prime mortgage loan problem. ③<u>I</u> <u>believe</u> <u>that</u> <u>it</u> <u>is</u> necessary for <u>us</u> to engage in discussions on <u>the</u> state of <u>the</u> global economy and financial markets, including what <u>I</u> <u>would</u> <u>call</u> <u>the</u> "21st century-style crisis" aspect of <u>these</u> problems, so <u>that</u> <u>we</u> <u>can</u> <u>achieve</u> sustained economic growth. ④Right now <u>we</u> <u>are</u> in <u>the</u> process of re-evaluating various risks. ⑤There <u>is</u> no need to take an excessively pessimistic view of <u>the</u> current situation, but at <u>the</u> same time we <u>do</u> <u>need</u> <u>to</u> <u>have</u> a sense of urgency as <u>we</u> <u>engage</u> in coordinated actions while each country also <u>implements</u> necessary domestic response measures. ⑥In working to resolve <u>the</u> sub-prime mortgage loan problem, there <u>are</u> lessons <u>that</u> <u>can</u> <u>be</u> <u>drawn</u> from Japan's painful experiences upon <u>the</u> bursting of <u>our</u> "bubble economy." <u>The</u> first of <u>these</u> <u>is</u> <u>that</u> a swift response <u>is</u> absolutely imperative. Second, <u>it</u> <u>is</u> critical to nip in <u>the</u> bud potential credit crunches resulting from diminished capitalization among financial institutions. ⑦From <u>this</u> perspective, <u>I</u> <u>welcome</u> <u>the</u> efforts of various countries' fiscal and financial authorities. ⑧<u>The</u> fiscal and

⑦このような観点より、各国の財政・金融当局の努力を歓迎します。	financial authorities of <u>the</u> major economies <u>have been</u>
⑧主要国の財政・金融当局は、最近の金融市場の混乱の要因を分析し、中長期対策についての検討を急いでおり、2月のG7でも議論される見込みです。⑨私は、こうした取組を推し進めていきたいと思っています。	<u>analyzing</u> <u>the</u> causes of <u>the</u> recent turbulence in <u>the</u> financial markets and <u>are</u> urgently <u>examining</u> various medium- to long-term measures, with <u>this</u> issue expected to be on <u>the</u> table at <u>the</u> G7 meeting in February. ⑨I <u>will</u> be working intently to move <u>these</u> efforts forward.

4. 調査結果

4.1 量的結果

2.3 節で掲げた本稿での分析対象項目と特筆すべき文法項目ごとにチェックした数を表示すると、以下のようになる（表3・表4）。

表3：事例①—ABCニュースと、NHKによるその同時通訳と時差通訳の分析結果

言語項目	日本語（同時，時差）	英語＜原文＞
人称代名詞	0, 0	11
指示詞・定冠詞	2, 4	53
人称代名詞の省略（ゼロ化）	△11, △11	—
状況の捉え方（モノ／コト）	—／7, —／10	／4
動詞の捉え方（他／自動詞）	35／24, 52／12	31／33
HAVE（モツ）／BE（アル）動詞	0／7, 0／18	1／17
スル動詞／ナル動詞	32／7, 23／5	30／0
動詞の態（能動／受動）	51／8, 60／4	30／1
時制（過去／現在；タ／ル形）	9／50, 11／53	13／46
仮定法	1, 0	3
時制の一致	0	1
完了アスペクト（have＋過去分詞）	—	現在＝8、過去＝0
進行アスペクト（be＋現在分詞）	—	5
モダリティ表現	0	0

表4：事例②—ダボス会議における福田首相特別講演と、外務省による英訳の分析結果

言語項目	日本語＜原文＞	英語
人称代名詞	6	29
指示詞・定冠詞	4	63
人称代名詞の省略（ゼロ化）	△23	—
状況の捉え方（モノ／コト）	—／11	—／5

動詞の捉え方（他／自動詞）	28／13	23／16
HAVE（モツ）／BE（アル）動詞	1／9	1／10
スル動詞／ナル動詞	27／4	22／3
動詞の態（能動／受動）	36／5	35／4
時制（過去／現在；タ／ル形）	2／45	2／33
仮定法	0	6
時制の一致	0	0
完了アスペクト（have＋過去分詞）	—	現在＝5、過去＝1
進行アスペクト（be＋現在分詞）	—	6
モダリティ表現	6	7

4.1.1 言語項目別の量的結果の分析

では、まず言語項目別の細かい分析基準とその結果を示してみよう。

1. 人称代名詞は、日本語の場合、「私、我々」という1人称のみ見られた。英語では多様であるし、事例も多かった。但し、本研究対象は両方とも2者間による対話ではないため、you ないし2人称は出てこなかった。また、人称代名詞の省略（ゼロ化）に関しては、英語で人称代名詞が使われているところ、日本語では使われていないケースを単純に引き算して示してある。日本語における代名詞の省略（ゼロ化）はかなり多いと思われる。
2. 指示詞・定冠詞は、日本語の場合、「この、ここまで、それら、こうした、このよ
うな」が見られた。英語の場合、圧倒的に多いのが定冠詞 the で、that もかなり多
い。these, this も散見された。日本語に比べ、英語のほうが圧倒的に多いことがわ
かる（Katori, 2006 参照）。
3. 状況の捉え方として、モノ化されているとの認定がかなり困難であった。つまり、
センテンスで表現しうるものを動詞の名詞形を使用して全体として名詞句で表現
するという言語現象であるが¹¹、認定が難しい事例が多いので、本稿では日本語の
場合は「こと」ないし「と／か（いうこと）」を「コト」化された事例、英語の場
合は that ないし疑問詞に導かれる補文を「コト」化された事例だと認定した。日本
語のほうが「コト」化された事例が多かった。
4. 動詞の捉え方に関しては、日本語・英語とも自動詞に比べ、他動詞のほうが多い傾
向が見られた。受け身の形は、日本語のほうが英語より多く見られた。
5. be 動詞は日本語・英語とも、使用された全動詞のうち相当の割合を占めている（1/4
から 1/8）。have 動詞はほとんどみられなかった。但し、英語の場合、完了時制と
して have が助動詞的に使用されている例はかなり見られた。
6. スル動詞は have 動詞を除く他動詞の総数で示してある。ナル動詞は、日本語の場
合は「なる」という動詞が使われている場合、英語の場合は become または come to
をこれに認定して数えた。ナル動詞に比べて、スル動詞のほうが日本語・英語とも
圧倒的に多いことがわかった¹²。

7. 時制は、英語と日本語とでは根本的にテンス・アスペクトのシステム自体が異なっている¹³、本稿では英語は過去形か現在形か、日本語ではタ形かル形かで判断した。但し、慣用化されている英語の仮定法表現 (would like to, would rather, should) は現在の事象を指標するものとして現在形と見なしている。また、上述のように英語では準動詞として扱われているものは時制の認定を行っていない。この点、日本語ではル形と認定できる事例が多く、日本語のほうが英語より現在時制が多い結果として現われている (水谷, 1985 参照)。
8. 時制の詳細として、英語における完了アスペクトと進行アスペクトを調べた。(現在) 完了形や (現在) 進行形の使用は単純形の使用頻度にくらべて、それぞれおよそ 15% ほどであった。
9. モダリティ表現については、言語学の諸学説でかなりその概念や操作定義に争いがある¹⁴、本稿ではさしあたり、英日語ともに＜発話時点における話し手の心的態度＞ (中右, 1994) としたうえで分析した。日本語では「と思います、と考えます」、英語では would like to, would rather, should, need to, I believe が見られた。

4.1.2 テキスト別の量的結果の分析

次に、2 種類のテキスト別の分析結果を示す。

1. 事例①：ニュースの場合、取材現場の報告を行う言語表現が多いため¹⁵、1・2 人称は皆無であった。指示詞・定冠詞は、日本語の場合は既出テキストを指標する前方照応の場合か、今ここの状況を指差し (pointing) によって指標する場合か¹⁶ である。この場合、レポーターや発言者が眼前の状況を指差しをして指標している状況が視聴者からは映像として受け止められるというテレビ映像に特殊な状況がある。英語の場合、前方照応以外にも、外界照応、テキスト内の前方照応 (the, it, that) ・後方照応 (the, it, this) の多用が著しい^{17, 18}。これは、英語という言語の文法構造として内蔵されている仕組みであり、日本語に比べた時の英語の顕著な特徴と言える。状況の捉え方は、英語よりも日本語のほうがコト化された表現が多いため、英語はモノ (有界性) 注視、日本語はコト (無界性) 注視といえよう。動詞のとらえ方は、原文の英語が他動詞と自動詞がほぼ同数であるのに対し、日本語では他動詞のほうが多い結果となっている。これは英語の原文の準動詞は動詞の数に入れていないためであり、本来は英語の原文も動詞の総計で計算すると他動詞のほうが多く、その結果を日本語では反映しているものと思われる。be (アル) 動詞は前述のとおり、日本語・英語とも比較的多用されている。スル・ナル動詞は、英語だとナル (come to, become) は皆無であった。他の自動詞によるナル的な表現はいくつか見られた。それに対して日本語は比較的多く見られた。時制に関しては、過去の事象に言及する際、英語のほうが若干過去 (タ) 形を使用する頻度が高い。
2. 事例②：福田演説の場合、政治家としての持論を述べる状況であるので、1 人称や自分自身を指標する「私」、国家全体として、あるいは地球全体としての不特定多数の「我々」という表現が見られた。英語では I ないし we で表されている。指示詞・

定冠詞は、英語の場合は事例①と同じであるが、日本語の場合は、事例①とは異なり、映像がないため、指差し指標は見られず、前方照応のみである。状況の捉え方、動詞のとらえ方、be (アル) 動詞は、事例①と同様である。スル・ナル動詞は、日本語で「ナル」動詞を使っている場合、英語でもナル (come to, become) と翻訳したためか、ナル動詞が事例①に比べて多い。日英翻訳という特殊性が反映されたものと思われる。時制に関しては、日本語のタ形は英語でも忠実に過去形で訳されている。仮定法 (反実仮想) に関しては、演説というテキストの性質上、仮定法は外界に言及する際に用いているのではなく、自己の意見表明をする際に仮定法を用いたモダリティ表現として使われている例がすべてであった。またモダリティ表現が日本語で頻出するため、英訳ではそれを踏襲したモダリティ表現として訳出されている。

4.2 質的結果

4.1 節の量的結果を踏まえて、いくつか具体的な事例を挙げて、質的な分析を施してみたい。ここでは、事例①は原文・同時通訳・時差通訳のテキストを掲げるが、事例②は 3.2 節の表で示したセンテンス番号を参照されたい。

4.2.1 テキストの内部構造

(1) テキスト内の結束構造・照応性

テキスト内の結束構造は、他にも事例が多く見られるが、以下の事例②原文③が典型例なので、この 1 例でもって特徴分析が十分できると思われる。

事例②原文③：(原文と訳出物は表 2 を参照)

[分析]

日本語の場合は、「今回の問題」という外界照応や「こうした 21 世紀型の危機」という前方照応のみが見られるが、英語の場合は、it ... to 構文で it が後方照応性、また these problems で these が既出情報への前方照応性、the global economy や the “21 century-style crisis” の the が外界照応性をそれぞれ担っているし、また so that の so はそれ以前のテキストをそのまま照応して that 以降で前方展開的に目的や結果の意味機能を担わせている。このように英語では、テキストと外界との照応性のみならず、テキスト同士の照応性が日本語よりも高い。

このことは、4.1 節の量的結果でも出ているように、英語のほうが圧倒的に指示詞が多く、定冠詞もあることから支持されるであろう (Katori, 2006 参照)。

4.2.2 テキストと外界の言及指示対象・認知主体との関係性

(1) 認知主体と外界との関係性

認知主体を言語化するか否かで、事態構成の仕方とそれを反映した構文選択の仕方が異

なる。

事例①原文：If the levee breaks down there, we'll have water up to three or four feet in this building.

同時：堤防が決壊すれば、水は3、4フィートの高さになるでしょう。

時差：堤防が決壊すれば、90 から 120 センチの水に浸かってしまいます。

[分析]

英語では have water up という事態構成の仕方をしているが、日本語では、「水は～の高さになる」、「～の水に浸かる」という事態構成の仕方をしている。英語では認知主体が言語化され、その認知主体が water up という状況を「(自分の所有・経験空間に) 持つ」¹⁹ という形で言語表現化する。他方日本語では、認知主体は言語化されず、水がある高さになると、あたかもその状況に認知主体がいて、その水が上昇しているのを経験しているかのように表現する。あるいは「水に浸かる」のように表現する。

事例①原文：Residents found everything covered with mud.

同時：住人は全てが泥に浸かっている家を見ました。

時差：全てが泥まみれです。

[分析]

英語では find everything covered with mud という事態構成をしているが、日本語では、同時通訳だと「全てが泥に浸かっている家を見ました」、時差通訳だと「全てが泥まみれです」としている。同時通訳の場合は認知主体を言語化し、さらに find の対象を「家」としている点で、モノ的表現、つまり、英語的な表現になっている。これはおそらく、同時通訳という時間的・認知的制約のなかで、認知主体である residents を訳出してしまったために、それと一貫させるように英語的な事態構成の仕方にあわせた認知モードを選択した訳出だと思われる。したがって、訳出に時間的余裕のある時差通訳では、認知主体を言語化せず、標的 (target)²⁰ のみ言語化し、それについて述定するという、事象のコト的把握の構造を取った訳出になっていると思われる。

このように、英語は英語らしい事態構成の仕方のみ、日本語は日本語らしい事態構成の仕方のみ縛られるのではなく、認知モードを切り替えることで、ある程度多様な構文選択が可能であることがこの事例から読み取れる。

(2) 動詞の捉え方、言及指示対象同士の関係性

動詞の他動性をめぐって、注目すべき言語現象が見られる。

事例①原文：Record rainfall and widespread flooding has ruined much of this year's crop.

同時：記録的な雨と洪水で今年の生産、ほとんど破壊されてしまいました。

時差：記録的な雨と広い地域での洪水によって収穫の多くが台無しになってしまいました。

[分析]

原文は他動詞の能動構文、同時通訳は他動詞の受動態構文、時差通訳は自動詞構文、となっており、後者になるほど動詞の他動性が弱まり、有界的なモノとモノとの因果関係の連鎖²¹が動詞によって示されるという構文から、参照点を提示し、その場（ground）²²で起こった出来事を標的と自動詞によって表すという構文へと、グラデーションが見られる。この同時通訳の訳例は、**ruin** という動詞の動作主体を受動態構文を取ることで背景化し、標的を前景化して言語化するというもので、これは自動詞構文寄りといえることができる。時間的余裕のある時差通訳のほうが、日本語としてわかりやすい表現を実現するために構文転換操作を行っている度合いが強いといえよう。

事例①原文：The president of the University of Iowa took us on a tour of what the river had claimed. 16 buildings, including the art museum and [...].

同時：アイオワ大学の学長が状況を見せてくれました。アイオワ大学では博物館を含む 16 棟が破壊されました。

時差：アイオワ大学の学長が構内を案内してくれました。16 棟が水没しました。

[分析]

英語では the river had claimed something[what] という他動詞を使った構文が選択されているが、同時通訳では他動詞の受動態構文、時差通訳では自動詞構文が選択されている。

このように、動詞の捉え方も、認知モードを切り替えることで、ある程度構文選択にも幅が生まれるといえよう。

(3) センテンス内焦点連鎖構造

外界は認知主体の投げかける視点（perspective）²³との関係で意味づけが行われ、その視点を差し向ける焦点と、それにさらに続く焦点とが連鎖する流れは言語によって異なると言ってよい。この焦点連鎖²⁴のあり方について、事態構成順と構成要素順とを関連させて見てみよう。

事例②原文①：（原文と訳出物は表 2 を参照）

[分析]

日本語では「米国サブプライム問題や石油価格の記録的高騰等を背景に」という情報が参照点（reference point）になり、それを足がかりに標的（target）である「世界経済の下方リスクが」という主語すなわち言及対象が提示され、「高まっています」と述定されるという視点と情報が流れている。文法関係では「①斜格→②主格→③述語」の流れであり、焦点連鎖では「①参照点→②標的→③述定」の流れである。他方、英語では、The risk of the global economy taking a downward turn is increasing という情報が先行している。すなわち、まずランドマーク（trajector）が主語として提示され、次いで述語（動詞）によって述定されている。そのあと、ランドマーク（landmark）²⁵として斜格 against the backdrop

[...] and the surge [...]が続いている。つまり文法関係では「②主語→③述語→①斜格」の流れ、焦点連鎖では「②trajector→③述語→①landmark」の流れになっている。

これは、日本語の場合、認知主体が外界に自らの視点を置き、ある種の主客合体（環境論的自己；池上, 2007; 本多, 2005 参照）をさせた認知モードで外界を言語化するため、まず参照点を提示し、ついでそこから焦点を標的に連鎖させて最も表現したい言及対象を提示し、その上で述定を行うという言語構造を取る。他方、英語では、認知主体が外界から自らの視点を脱主体化（desubjectification）させ（中村, 2004, pp. 33-48）、ある種の客観的な視点から外界を捉えて言語化するという構図を取るため、まず第 1 に際立っている焦点の対象であるトラジェクターを主語として提示し、ついで述語、さらに第 2 に際立っている対象であるランドマークを目的語ないし斜格として提示する、という基本構造の違いが読み取れる。

事例②原文②：（原文と訳出物は表 2 を参照）

[分析]

日本語では「①参照点→②参照点→③標的→④述語→⑤モダリティ」という焦点連鎖の流れになっているが、英語では 3 文に分断されて「主語→動詞→②／③／⑤→④→①」（ここでの主語→動詞は日本語の原文にはない情報が明示化²⁶されている）という焦点連鎖の流れが起きている。

以上 2 つの事例のように、「標的－述語」という文の骨格に当たる情報の提示順が、日本語ではセンテンスの左方傾向、英語では右方傾向にあることが読み取れる。次の例では、情報の塊（chunk）ごとに区切りを入れて考えてみよう。

事例②原文③：①今回の問題の、/②こうした「21 世紀型の危機」という側面も踏まえ、/
③持続的な経済成長が得られるよう、/④世界の経済・金融市場の在り方について/⑤議論していく/⑥必要があると/⑦思います。

翻訳：I believe/ that it is necessary/ for us to engage in discussions/ on the state of the global economy and financial markets,/ including what I would call the "21st century-style crisis" aspect/ of these problems,/ so that we can achieve sustained economic growth.

[分析]

日本語では標的である⑤「議論していく」、述語である⑥「必要がある」に至る焦点連鎖のプロセスとして、「①参照点→②参照点→[③斜格]→④参照点→⑤標的→⑥述語→⑦モダリティ」というズーム・イン方式²⁷を取っている（①→②→④→⑤の流れ）のに対し、英語では、「⑦→⑥→⑤→④→②→①→③」というズーム・アウト方式を取っていることがわかる。

以上からわかるように、視点が外界に内在する認知モードを取る日本語では、まずその視

点から見て参照点となる対象を認知し言語化する。そして、焦点を次の参照点へ移し、さらに次の参照点に移して標的に達してから述定するという構図があるのに対し、英語は視点が外界から外置されているため、際立ち度の高いトラジェクターを主語に立て、述定したあとで、際立ち度の低いランドマークを提示してゆく、という構図を取ることがわかる。

(4) 外界の言及指示と時制

日本語は視点が外界に内蔵され、英語では外置されるという違いが、時制に関してどのような言語現象として現われるか、次の例で見てみよう。

事例①原文：Residents found everything covered with mud. Possessions scattered. Homes soaked through to the foundation. A nightmare for health officials. Police officers have had to deal with tempers flaring at checkpoints.

同時：住人は全てが泥に浸かっている家を見ました。土台まで家は水に浸かっています。

警官は感情的になった住民に対応する必要ができました。

時差：全てが泥まみれです。家の土台もすっかり水に浸かりました。衛星当局にとってこれは大きな問題です。検問所では警官は感情的になった住民との対応に追われました。

[分析]

視点内蔵型の日本語では、言及対象である外界事象が過去の場合、過去に視点が移動することもあるため、過去のことを必ずしもタ形で示すことはない。同時通訳での「水に浸かっています」、時差通訳での「全てが泥まみれです」。また、英語で名詞句として不完全なセンテンスのまま表現している箇所は、時差通訳では「大きな問題です」と、ル形で訳しているのもその一環である。逆に、英語で「現在」完了形で示している箇所も、日本語では現在に視点を置けば、完了時制の示しているその出来事の完結性から、タ形を使ったものと解釈できよう。

このように、時制システムにおいても、視点外置・固定型の英語と、視点内蔵・移動型の日本語とでは、必ずしも「過去形＝タ形」・「現在形＝ル形」という対応をしないことがわかる。

以上のように、(1)テキストの内部構造の特徴と、(2)テキストと外界の言及指示対象・認知主体との関係性について事例に即して見てきた。これらから抽出される英語・日本語の「形態」とは何かについて、次節で考察してみよう。

5. 調査結果の考察

池上 (2007) が「日本語＝主客合体／英語＝主客分離」と言い、中村 (2004) が「日本語＝状況密着型認知形態／英語＝認知主体外置型認知形態」と言ったことを上記の分析結果から敷衍すると次のようになるだろう。

まず、一般の言語行為状況を記述してみよう。ヤーコブソン (1973, pp. 154) を多少言

い換えると、言語行為を発話出来事(=E^s；その基点をオリゴと呼ぶ)とし、それが指標する出来事を語られる出来事(=Eⁿ)とし、そしてそれぞれの参加者をP^s、Pⁿとすると、転換子は、人称=Pⁿ/P^s、時制=Eⁿ/E^s、法=PⁿEⁿ/P^sの関説であると言える(ヤーコブソン, *ibid.* pp. 154-166)。また、E^sとEⁿの指標関係は、(i) オリゴで行われる発話出来事を指標する再帰的カリブレーション、(ii) 具体的な経験的出来事空間で現実が生起する(した)出来事を指標する報告的カリブレーション、(iii) 遠い象徴空間の事象を指標する象徴的カリブレーション、の3つが考えられる(Silverstein, 1993)。

ここで、上記考察結果を踏まえると、まず、英語はオリゴに視点が固定され、かつ外界というコンテキストを客観的に言語化し、視点が外置されているのに対し、日本語は視点が固定されず、外界とのインタラクションをする主客合一の形で言語表現をし、視点がコンテキストに内蔵されている。つまり、「英語は視点外置・固定型」、「日本語は視点内蔵・移動型」であると言える。そこから次のことが演繹される。

まず、英語では認知主体の視点が外置されているため、人称代名詞が客観的に頻繁に表示されるのに対し、日本語では認知主体が自己言及して1人称を使用するのは、自己を前景化させる動機づけが背後にある場合である。3人称については、視点が内蔵されている日本語では、それを客観的な代名詞で言語化する必要は特になく、必要があれば言及対象をそのものとして固有名その他を用いて表現することになる。したがって日本語では代名詞のゼロ化現象は頻繁に見られる。指示詞に関しても、英語の場合は外置された視点から客観的に事態構成するため、言及対象同士の関係性を指示詞によって客観化する頻度が高いが、日本語の場合は状況に埋没させ、わざわざ指示詞を使用する必要はなく、特に指示が必要な場合に指示詞を使うという動機づけが想定される。特に、*the* は①外界照応、②ポインティング、③テキスト内照応の3つがあり、外置された視点から対象を言及指示する際に、一つ一つ「指定」(*specifying*)するという動機づけがあるために *the* の使用頻度は高い。また *that*, *this* などの指示詞も同様に、外置された視点から対象を言及指示する際に、オリゴとの距離感を指標する必要性は日本語に比べて高い。そして英語に極めて特徴的なのは、上記①②といういわば外界を指標する際に指示詞・定冠詞を使用するのみならず(日本語にも見られる)、E^sがEⁿを指標する際にEⁿ=E^sつまり既出コ・テキストに言及するという(i) 再帰的カリブレーションとしてテキスト内照応させている頻度が高いことである。以上の考察から、英語は日本語に比べ、認知主体や発話出来事に対する「自己言及性」(*self-reflexivity*)が高いことが言えよう。

つぎに、日本語のほうがコト化された事態構成の頻度が高いのは、状況に視点が内蔵されているため、出来事の直接経験性が高く、ある出来事や事象を英語のように名詞句表現でモノ化するのではなく、動詞は動詞のまま表現するという動機づけが働いているものと思われる。したがって、ある事態をセンテンスで表現し、それをコト化してつなげるという表現形態が取られやすい。また、動詞のとらえ方に関しては、あるモノが他のモノへ働きかけをして変化を引き起こしたという因果律を明示化する英語に対して、日本語は、モノがあり、それを参照点としてその状況下で別のモノに何がしかの変化が起こる、という事態構成を好むと考えられる。したがって、日本語のほうが受け身形が多く見られるなど、

ナル的な動詞表現が多いこととなる。しかし、量的調査では、このような傾向は多少特徴的だと考えられる程度の違いとなって現れている。とはいえ、4.2 節の質的結果からもわかるように、同じ事態を構成する上で、英語はスル的・他動詞構文的な表現を好み、日本語はナル的・自動詞構文的な表現を好むことは確かである。また、このことは焦点連鎖構造における英日語の違いともパラレルに論じることができるであろう（詳しくは上記 4.2 節参照）。

時制に関しては、数字の上では若干の違いしか見られなかったが、日本語のほうが過去の E^n に対してル形（現在形）を使う頻度が高いのは、オリゴに視点が固定されている英語とは違い、日本語の場合、視点が E^n に移動するからだと考えられる。別の言い方をするならば、発話出来事によって言及対象たる E^n はオリゴで表現され（re-presentation、つまりオリゴ外空間で present な事態をオリゴで re-すなわち再び present 現前化すること）、提示されると考えるならば、オリゴに視点が内置されているところに E^n を引き込む力、つまり言語の現前化力が日本語のほうが強いと結論づけることができよう。

6. まとめと今後の課題

以上から、本稿の調査結果をまとめると、日本語は「視点内置・移動型」認知形態で、言及指示対象の現前化力が強い、他方、英語は「視点外置・固定型」認知形態で、自己言及性が強い、と結論づけることができる。そして、実際の通訳翻訳事例でもそのことが量的データによってある程度裏付けられたと言えよう。つまり、通訳翻訳の実際において、訳出者は日本語や英語特有の認知形態に合致する形で訳出物を産出するために、かなりの程度シフトが生じるように転換操作を行っていることが今回の結果からわかった。

ただし、本稿が扱った分析対象はテキスト・タイプの点でも、分野においても、状況設定の面でも相当限られたものであるので、今後、さまざまな対象テキストを使ってさらに分析を行ってゆく必要がある。また、今回、転換子のうちの「法」については顕著な特徴が詳らかにできなかった。その他、あまり違いが見られなかった項目に関しても、緻密な調査を行ってゆく必要があるだろう。

また、本稿は英日・日英の通訳翻訳の具体的な訳出物という結果の分析であった。しかし、通訳翻訳においては、前述のように、訳出する目的（skopos）やその他様々な外的な要因によって、起点言語にどの程度転換操作（conversion）を施すことによって、目標言語らしさを確保するかが方略的に変わってくる²⁸。理論的には、原文は外界の（あるいは内面の）事態を認知し言語化する上での事態構成（construal）を行うが、通訳翻訳では、まず起点テキスト自体が外界となりそのテキストの解釈（interpretation）が事態構成となる。そして、それを基に今度は目標言語に言語化するという意味での再度の事態構成（construal）を行うことになる。本稿では、かような通訳翻訳の認知プロセスの中でテキスト内の内的要因とテキスト外の外的要因によってどの程度転換操作に影響が及ぶかについての解明には迫ることができていない。今後、目標言語らしさを確保するための転換操作（conversion）とそれを機制する様々な要因との関係について分析を深めてゆきたい。

筆者紹介：河原清志（KAWAHARA Kiyoshi）立教大学異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了。東京外国語大学大学院・青山学院大学などの非常勤講師。専門は通訳翻訳学・認知言語学・英語教育学。日本通訳翻訳学会幹事。

【註】

- 1) Munday (2008) によれば、英語の‘translation’は一般的かつ包括的な用語で、一般的には、‘Translation’という表記によって通訳（‘interpretation’/‘interpreting’）と翻訳（‘translation’）を包含する。本稿はまさにこの‘Translation’を扱うものである。
- 2) 翻訳シフト（ずれ）に関しては、様々な先行研究があるが、代表的なのは Catford (1965/2000) である。同書ではシフトを大きく①レベル・シフトと、②カテゴリー・シフト（構造、クラス、ユニット／ランク、体系内）に分けている。本稿が扱う文法範疇の分析はこれらすべてのシフトに関わってくるものである（詳細は割愛する）。
- 3) ‘literal’（word-for-word）か‘free’（sense-for-sense）かに関し、古くは Cicero（46 BCE）や St Jerome（395 CE）に遡る。
- 4) 本稿は日本語「らしさ」を論ずるものである。したがって、「真か偽か」という古典的カテゴリー観ではなく、「～らしさ」というプロトタイプに基づいたカテゴリー化を論ずるものである（Lakoff, 1987; Taylor 2003）。
- 5) ここにいう construal は「発話プロセスにおいて、外界を把捉し分節して意味あるものとして構築する創造的営み」のことである（菅井, 2002）。
- 6) 池上（2007, p. 69）による。
- 7) 註 1 参照。
- 8) A:B::A':B' という構造があった場合、A と A' は B と B' との関連において相同項であるといひ、（少なくとも）二つの項から成る（少なくとも）二つの関係の間に等価の関係のあることを相同性（homology）という（池上, 2007, pp. 86-95）。
- 9) 語られる出来事およびその参加者が、発話出来事およびその参加者への間説を含む場合を転換子（shifter）という（ヤーコブソン, 1973, pp. 154-158）。具体的には、人称、法、時制、証言性がそれに当たる。
- 10) 放送通訳における時差通訳とは、ある一定の時間をかけて訳出し、ボイスオーバーする通訳と翻訳の間に位置する訳出手法である（稲生・河原, 2008）。
- 11) 動詞⇄名詞の品詞転換論については河原・永井（2004）、観念構成的比喩と名詞化についてはハリデイ（2001, pp. 554-557）。
- 12) この点、日本語は「ナル」型言語（become 言語；＜或る状況になる＞というように、動作主体を目立たせない形で表現する傾向が強い言語）であるという見方は従来の言語学・日本語学における共通理解であるが（池上, 1981 など）、「する」の本質的意味は＜現出＞であり、そこから「動作・行為」「感覚的知覚対象の現出」「属性」「時の経過」を表す用法が生ずることに着目し、日本語は＜主部項目において、或る事象が現出する＞というあり方

- で事態を把握・表現する傾向が強く、真の意味で「スル」型言語である、という主張がなされている（竹林, 2008, pp. 125-144）。
- 13) 英日語の時制現象の違いについては、樋口・大橋（2004, pp. 115-130）参照。
 - 14) モダリティに関する諸学説は、黒滝（2005）、澤田（2006）などが詳しい。
 - 15) 動画コミュニケーションにおける「現場」と「現実」（今ここ）の問題は、メディア論を論じている大黒（2006）などを参照。
 - 16) ここでは指示詞に関して、英語の定冠詞の用法を当てはめて考えてみよう。定冠詞の機能は「指定」（specifying）であり、これには①集団・個人間の共有知識、②ジェスチャーによる指定（pointing）、③言語コンテキスト（前後関係）の3つがその指定を動機づけるとされている（Allen and Hill, 1979）。ここでのケースは②の場合である。
 - 17) 石田（2002）は、定冠詞の用法として、外界照応的用法（人類全体が共有している一般的知識、特定の共同体あるいは国民が共有している一般的知識、ある特定の場面に当てはまる個人的・背景的知識）、前方照応的用法（同一語による前方照応、同義語による前方照応、連想による前方照応）、後方照応的用法を挙げている。
 - 18) さまざまな照応関係とテキストの結束性に関しては、ハリデイ・ハサン（1997）参照。
 - 19) この意味記述は『E ゲイト英和辞典』（pp. 753-758）による。
 - 20) ある事物 A の概念を想起して、それを手がかりにして別の事物 B との心的接触を果たし概念化する認知能力を参照点能力といい、ここにいう A が参照点、B が標的である（熊代, 2002）。
 - 21) この連鎖関係に関しては、主に action chain model (Langacker, 1990)、causal chain model (Croft, 1990) がある。
 - 22) この場のことを、支配領域（dominion）ともいう（山梨, 2004, p. 37）。参照点によって限定される標的の候補の文脈（context）のことである。
 - 23) 視点とは、主体である話し手が状況の解釈においてとる見解・立場の意である（吉村, 2002）。
 - 24) 焦点連鎖とは、われわれが談話ないしテキストを展開する際、その談話ないしテキストの重要なテーマとなる部分を焦点化し、その焦点化された部分が起動する文脈に存在する対象に焦点を当てて連鎖的に移動することである（山梨, 2004, p. 23 参照）。
 - 25) 1 次的な焦点としての際立ちをになう対象を *trajector*、際立ちがより低い 2 次的な対象を *landmark* という（山梨, 2004, p. 19）。なお、通常 *landmark* はセンテンスの述語に含まれるという位置づけではあるが、本稿では情報処理の単位を明確化するために、述語と *landmark* を切り離して事例分析を行っている。
 - 26) 翻訳（通訳）における明示化（*explicitation*）とは、起点言語では文脈や状況からあきらかであるために言葉で表さなかった暗示的な情報を、目標言語では言葉で明示的に表すプロセスである（Vinay and Darbelnet 1958/1995, p. 344）
 - 27) より広いドメインから狭いドメインへの焦点の絞込みを行う認知プロセスをズーム・イン、より狭いドメインから広いドメインへと広げていく認知プロセスをズーム・アウトと呼ぶ（山梨, 2004, pp. 51-56）。いずれも入れ子式探索表現である。
 - 28) この論点は、キケロの時代から議論されている直訳か意識か、あるいは文化イデオロギー

を前景化すれば異質化翻訳（foreignization）か受容化翻訳（domestication）かという（発見型の）二項対立と深く関連する（Venuti, 1995; 1998/2008）。また、通訳翻訳形態や訳出における具体的状況や社会文化歴史的状況によっても左右されるので、英日語の各特徴を明らかにするには、通訳翻訳外のパラレル・テキスト（例えば、同じ事件をめぐる英語・日本語での新聞報道での同じ記事どうしを比べるなど）を比較対照する調査も行う必要があるだろう。

【参考文献】

- Allen, R. and Hill, C. (1979). Contrastive between ϕ and THE in spatial and temporal predication: unmarked representation of coding locus as reference point. *Lingua*. 48:123-176.
- 安藤貞雄（1986）『英語の論理・日本語の論理』大修館
- 安西徹雄（2000）『英語の発想』筑摩書房
- 安西徹雄・井上健・小林章夫（編）（2005）『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社
- Baker, M. (1992). *In Other Word.*, London: Routledge.
- Catford, J. C. (1965/2000). *A Linguistic Theory of Translation*, London : Oxford University Press (1965).
See also extract ('Translation shifts') in Venuti, L. (Ed.) (2000). 141-147.
- コムリー, B. (1992) 『言語普遍性と言語類型論』（松本克己・山本秀樹・訳）. ひつじ書房 [原著 : Comrie, B. (1981/1989). *Language universals and linguistic typology: syntax and morphology*. Chicago: University of Chicago Press].
- コセリウ, E. (2003) 『一般言語学入門』[第2版]（下宮忠雄・訳）. 三修社 [原著 : Coseriu, E. (1973). *Lezioni di linguistica generale*. Torino : Boringhieri]
- Croft, W. (1990). Possible verbs and the structure of events. In Savas L. Tsohatzidis, (Ed.). *Meanings and prototypes: Studies in linguistic categorization*. 48-73. London: Routledge.
- Foley, W. A. & Van Valin, R. (1984). *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, T. (1984/1991). *Syntax: A functional-typological introduction, 2vols.*, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Greenberg, J. (1974). *Language typology: A historical and analytical overview*. Jauna Linguarum, Series Minor 184. The Hague: Mouton.
- ハリデイ, M. A. K. (2001) 『機能文法概説』（山口登・笈壽雄・訳）大修館 [原著 : Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar. 2nd edition*. Oxford: Oxford University Press] .
- ハリデイ, M. A. K. & ハサン, R. (1997) 『テキストはどのように構成されるか』（安藤貞雄・本田保行・永田龍男・中川憲・高口圭輔・訳）ひつじ書房 [原著 : Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman] .
- 樋口万里子・大橋浩（2004）「節を越えて：思考を紡ぐ情報構造」大堀壽夫（編）『認知コミュニケーション論』（101-136 頁）. 大修館
- 本多啓（2005）『アフォーダンスの意味論：生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
- Humboldt, W. (1999). *On language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Langacker, R. W. (1990). Settings, participants, and grammatical relations. In Savas L. Tsohatzidis, (Ed.). *Meanings and prototypes: Studies in linguistic categorization*. 213-238. London: Routledge.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」 中村芳久 (編) 『認知文法論』 (3-51 頁). 大修館
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』 大修館
- 池上嘉彦ほか (1982) 『日英比較講座第4巻：発想と表現』 大修館
- 池上嘉彦 (1991). 『＜英文法＞を考える』 筑摩書房
- (1999～2001) 「‘Bounded’ vs. ‘Unbounded’ と ‘Cross-category Harmony’ (1)～(24)」 『英語青年』 1994 年 4 月号—2001 年 3 月号. 研究社
- (2007). 『日本語と日本語論』 筑摩書房
- 稻生衣代・河原清志 (2008) 「放送通訳における同時通訳と時差通訳の比較」 『通訳研究』 第 8 号, 37-56.
- 石田秀雄 (2002) 『英語冠詞講義』 大修館
- Katori, Y. (2006). Translating Cohesion in Journalistic Texts, between Japanese and English. In *Interpretation Studies*. No. 6: 69-89.
- 河原清志・永井邦和 (2005) 「認知言語類型論に基づく日英通訳・翻訳における品詞転換方略の分析」 『異文化コミュニケーション論集』 No.3, 81-94.
- 熊代敏行 (2002) 「参照点 (reference point)」 辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』 (88-89 頁). 研究社
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Thing*. Chicago: University of Chicago Press.
- メイナード・k・泉子 (2004) 『談話言語学：日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』 くろしお出版
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版
- Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies*. London : Routledge.
- 大黒岳彦 (2006) 『＜メディア＞の哲学：ルーマン社会システム論の射程と限界』 NTT 出版
- 黒滝真理子 (2005) 『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性：モダリティの日英語対照研究』 くろしお出版
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 大修館
- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』 開拓社
- 菅井三実 (2002) 「解釈／捉え方 (construal), 解釈する (construe)」 辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』 (20-21 頁) 研究社
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In Lucy, J.A. (Ed). *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics.*: 33-58. Cambridge: Cambridge University Press.
- 竹林一志 (2008) 『日本語における文の原理：日本語文法学要説』 くろしお出版
- 田中茂範・武田修一・川出才紀 (編) (2003) 『Eゲイト英和辞典』 ベネッセコーポレーション
- Taylor, J. (2003). *Linguistic categorization*. Oxford: Oxford University Press.
- Van Valin, R. (Ed). (1993). *Advances in role and reference grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

- . (2005). *Exploring the syntax-semantics interface*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Valin, R. & LaPolla, R. (1997). *Syntax: structure, meaning and function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London: Routledge.
- . (1998/2008). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. London: Routledge.
- Vermeer, H. J. (1989/2000). Skopos and commission in translational action. In Venuti, L. (Ed.) (2000). 221-32.
- Vinay, J.-P. and Darbelnet, J. (1958/1977). *Stylistique comparée du français et de l'anglais: Méthode de traduction*. Paris: Didier, translated and edited by Sager, J. C. and Hamel, M.-J. (1995). as *Comparative stylistic of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam and Philadelphia, PA: John Benjamins.
- ウェイリー, L. (2006) 『言語類型論入門 言語の普遍性と多様性』(大堀壽夫・古賀裕章・山泉実・訳). 岩波書店 [原著: Whaley, L. J. (1997). *Introduction to typology: The unity and diversity of language*. Thousand Oaks: Sage Publications].
- Whorf, B. L. (1956). *Language, thought and reality*. Cambridge: MS.
- ヤーコブソン, R. (1973) 『一般言語学』(川本茂雄・監修・田村すず子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子・訳). みすず書房 [原著: Jakobson, R. (1963). *Essais de linguistique générale*. Paris: Editions de Minuit].
- 山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』 開拓社
- 吉村公宏 (2002) . 「視点／観点／パースペクティヴ (perspective)」 辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』 (98-99頁). 研究社

【参考資料】

- ダボス会議における福田首相特別講演 (2008 年 1 月 26 日)
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/20/efuk_0126b.html
- ダボス会議における福田首相特別講演 (2008 年 1 月 26 日) 英訳版
<http://www.mofa.go.jp/policy/economy/wef/2008/address-s.html>
- ABC ニュース World News Tonight (2008 年 6 月、NHK BS-1 放映分)
 英語オリジナル、日本語同時通訳、日本語時差通訳

